

◇巻頭言◇

女性・地理学・大学院

浅井辰郎

文教育学部では昨年6月に全学科に跨がる「比較文化論」の博士課程設置を強力に申請した。その実現時期は未詳だが大きな設置理由には、1) 国立女子大学の先頭にたつお茶大はその故に博士課程を持つべきだという格式論、2) お茶大の卒業生・修了生が他大学へわざわざ行かなくてもホームグラウンドで楽に入学できるべきだという現実論、3) 女性には家庭・育児という男子にない事情があるから、それが軽減した暁に再教育をうけて社会に復帰・貢献すべきだという生涯教育論、4) 女性だけの博士課程には学部以来の温室の棟をさらに延長するだけだから、男子も入れて学問的・人間的刺激を高めるべきだという共学論、などがあった。

さてここでの問題は、以上の諸論をふまえて博士課程は地理学科や地理学専攻の卒業・修了者にどう受け入れられるであろうかということである。よい面は別として、一つ気になるのは修士課程でさえ定員に充たないのだから、博士課程に常に優秀な学生が来るであろうかということである。共学論も悪くすると女性を駆逐することになりかねない。それでは本末でん倒であり少しも題目の三点をうまくまとめられない。なるほど、地理学は帝王の学つまり国家運営の学であり、学校教育に欠かせない課目であるとおだてられるが、日本の現実では政府や地方機関に入っている地理学徒はごく僅かである。

社会における地理学のこの地位は、日本地理学会が今推進している公務員上級試験に「地理職」を置くことが成功すれば大きく前進するであろうが、早急にはその女性までの連鎖反応は期待できない。

しかしこの表立った仕事のほかにも大切な地理学上の仕事が案外気付かれていないことを指摘しよう。第1は今ある修士課程で十分に最近の地理学を学んだ上、家庭に在っても地理学書、論文の翻訳に取り組むことである。その理由は現在日本の地理学界によい翻訳がまことに少いからである。第2は修士課程に勉強する傍ら司書の資格も取って、パートタイムで地理学関係の大学研究室や学会の管理運営を行うことである。まことに地味ではあるが人の信頼を受けることこれほどの仕事も亦少ないと思う。

どうか修士課程を、そして設置されたら博士課程もはっきりした目的をもって利用され、日本の地理学に表裏にわたって実力をつけて下さるよう卒業生、とくに家庭にいる方々、在校生にお願いしたい。